

活 動 報 告

明星大学国際コミュニケーション学会

2017年2月4日(土)に明星大学国際コミュニケーション学科(Meisei University International Studies Association)、略称 MUISA の第8回大会が開催されました。今年度は、毛利聡子学科主任を会長とし、岩下俊治先生が会計を担当されました。今年度の MUISA の開催は、深田芳史先生のゼミが企画・運営・進行を担当されました。対象は在校生で、180名近くの学生が参加しました。23号館を全て使い、2階、3階、4階の教室を使って行いました。また、今年度も入学前教育の一環として、入学予定の高校生を招待し、42名が参加しました。

今年度の MUISA は「MUIS フェス」という学生の学びの発表の場に加えて、イベント要素を強く押し出した学生学会となりました。23号館のエレベーターホールでは、「自立と体験2」の履修者が自分たちで手掛けた”キティちゃんプロジェクト”の商品を実際に販売し、多くの学生の興味を惹いていました。午前中のイベントではフィールドワークの発表が7教室で開催されました。ザンジバル、ルーマニア、カンボジア、中国、ベラルーシ、映像翻訳、オリエンテーションキャンプ、夏の文法塾、サマースクールの計9つの海外・国内フィールドワークが、色彩豊かにそれぞれのフィールドワークの特徴や体験からどのような学びがあったかを在校生と入学予定の高校生に対して発表を行いました。それと同時に、留学経験者の発表も行われました。留学の発表では、7か国の欧米圏と中国語圏、そしてタイの交換留学の発表がありました。次年度留学をする在校生や高校生に向けて、留学での経験について体験談を元に発表を行い、活発な質疑応答がありました。特に入学前の高校生の中には留学を希望している生徒も多く、熱心に先輩の話に聞き入っていました。お昼の時間からは、各先生方のゼミ紹介が行われました。11人の先生方のゼミ紹介やゼミでの研究発表があり、卒業論文やゼミのテーマなど各ゼミがポスターやパワーポイント、動画など様々な形式で紹介・発表していました。また、その後のゼミでの昼食では、ポットラック形式でそれぞれのゼミの特徴を活かした食べ物や飲み物が出て、ゼミ間での交流も盛んに行われていました。

午後からは、英語でのプレゼンテーションと日本語ディベート大会、そして映像翻訳フィールドワークによる第11回 UNHCR 主催難民映画祭の上映作品の特別アンコール上映会が行われました。難民映画祭の特別アンコール上映会では、映像翻訳フィールドワークで字幕制作を行った「ストーム・ストーリーズ～戦禍を逃れた子どもたち」の上映が行

われ、こちらには高校生が多く参加しました。それまで難民問題は自分と関係のない出来事だと感じていた高校生にとっては大変心を打たれた作品だったと思います。また、上映後の学生トークセッションでは、この映画を翻訳する上での言葉の難しさや難民の置かれている状況などについて学生自身の言葉で説明していました。特に、映像翻訳フィールドワークと学科の学びがどのように関係しているのかという学生の話は、在校生への新しい気づきとなりました。

今年から新たに加わったプログラムの一つで、英語のプレゼンテーションも同時に開催されました。”Welcome to Tokyo”というタイトルで6グループが発表を行いました。新しいアプリの開発や、駅や公共施設の掲示についてなど、興味深い提案が多くあり、審査員の客員の先生方も関心しながら発表を聞いていました。日本語ディベートは「憲法9条を改正すべき」という論題でディベートを行いました。日米安全保障条約や他国との関係についての鋭い質疑応答が飛び交う白熱した議論となりました。

学生が主体となって企画・運営を行った学会でしたので、改善すべき点がいくつもありましたが、無事に学会を終了する事ができました。先生方や学生たちの協力に心より感謝いたします。来年度の改善点として、在学生に対する広報活動を積極的に行う必要性が挙げられます。加えて、スケジュールの確認や時間帯の調整など運営側の改善点も多くありました。入学前教育プログラム担当としての反省としては、学生に、人の流れや教室の配置をする際に想像力を豊かに企画・運営を行える仕組みがさらに必要であると痛感しました。来年のMUISフェスは、上記のような改善点を実行してさらに充実したものを期待したいと思います。（文責 川又）